

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書
(3年計画の1年度目)

1. 研究課題

(和文) ヨーロッパ現代思想と政治

(英文) European Contemporary Philosophy and Politics

2. 研究代表者

(氏名) 市田良彦

3. 研究期間

2011年4月から2015年3月まで

4. 研究目的 (400字程度)

本研究の目的は、ヨーロッパ現代思想と「政治」の関係を問い直すことにある。ここでヨーロッパ現代思想とは、およそ1968年前後のフランスを中心に勃興し、その後「ポストモダン」ないし「ポスト構造主義」などとも呼ばれてきた思想的諸潮流（フーコー、ドゥルーズ、デリダら）を指す。「新左翼」の興隆とも軌を一にして現れたこうした諸潮流の論者たちは、1990年代以来、ソ連圏の崩壊とEUの成立という情勢の変化にともない、あらためて「政治」との関係を主要な考察対象としつつ新たな展開を見せている。その事情は日本でも、ネグリ、バディウ、ランシエールといった思想家たちの紹介を通じて知られていよう。こうした動向はいかなる思想的な系譜の上に立ち、いかなる「政治」状況のなかから出てきたものであったのか。また1968年以來のヨーロッパの現代思想において、そもそも「政治」とはどのような営みとして把握され、「思想」や「哲学」との間にいかなる理論的・実践的な関係が提起されてきたのか。本研究はこうした問いを通じて、ヨーロッパにかぎらず広く政治をめぐる思考の現状に介入することを目指す。

5. 本年度の研究実施状況 (400字程度)

本研究会では本年度、定例研究会を五回、共催の研究集会・公開シンポジウムを各一回開催した。班員が全国に散らばっており、予算も限られている現状では、研究会の開催数も限られざるをえないので、できるだけMLも活用して、研究会での議論を共有し、共通のアプローチで研究が進められるよう配慮している。

定例研究会

- | | |
|--------------------|---|
| 第1回 2011年4月8日 (金) | 市田良彦「戦後政治と哲学者群像」
班員自己紹介 |
| 第2回 2011年6月25日 (土) | 佐藤淳二「『レ・タン・モデルヌ』創刊直後の政治的布置—サルトル、メルロ＝ポンティ、アロン」 |

- 第3回 2011年10月8日 (土) 崎山政毅「プレザンス・アフリケーヌPrésence Africaine」とそのまわりーパンアフリカ主義と「知識人」ー
小泉義之「<国家論なき政治論>からドゥルーズ／ガタリへ」
信友建志「縫合をめぐるいくつかの事情」
- 第4回 2012年2月4日 (土) 長原豊「D-G/M試論 ver. 2」
多賀健太郎「政治と媒介 戦後ドイツにおけるアドルノ」
中村勝己「オペライスタはプロレタリア革命の夢を見たかー1970年代のトロンティ、ネグリ、カッチャーリの文献を読む」
- 第5回 2012年3月10日 (土) 布施哲「"ポストマルクス主義"とラクラウ」

研究会・公開シンポジウム

- 研究会 2011年6月24日 (金) セリーヌ・スペクトール
"Journée de travail Rousseau-Rawls : Histoire, raison, fondation" (「ルソー／ロールズ：歴史・理性・創設」)
- 公開シンポジウム 2012年2月5日 (日) 人文研アカデミーシンポジウム「日本から見た68年5月」
長崎浩、西川長夫、安丸良夫、上野千鶴子、伊藤公雄、中島一夫、市田良彦

研究会は、「啓蒙とフランス革命ー1793年の研究」班(富永茂樹・班長)・北海道大学「フランス啓蒙思想における<戦争>表象と<平和>表象の包括的研究」科学研究グループ(佐藤淳二・研究代表者)との共催。公開シンポジウムは、京都大学人文科学研究所との共催。

6. 研究成果の概要(400字程度)

第一回の研究会で、市田良彦は、*Les Temps Modernes*周辺の「戦後思想と現象学」のかかわりとスターリン批判とアルジェリア戦争以後の「様々な左翼」の誕生から出発して、日本のコンテクストとの異同も考慮しながら、「ヨーロッパ現代思想と政治」の歴史的系譜の再検討することを呼びかけた。その際、市田はとくに、フーコー、アルチュセール、バディウなどに通底する政治的な「主体」の問題系に注目を促した。市田はさらに『革命論：マルチチュードの政治哲学序説』(後述)で、この問題系の変遷を、アルチュセール以降、ネグリ、バディウ、アガンベンらにいたる、フランス・イタリアを中心とする現代政治哲学史の展望のなかで示している。

この問題提起を受けて、第二回研究会以降、歴史的な展望にしたがって研究会が組織された。その過程で議論の対象とされたのは、サルトル・メルロ＝ポンティ・アロン(佐藤淳二)、ファノンのパンアフリカ主義(崎山政毅)、ミレーとルクレールの精神分析上の議論(信友建志)、アドルノ(多賀健太郎)、トロンティ、ネグリ、カッチャーリらに代表されるイタリア・オペライスマ、ラクラウのアルゼンチン・ポピュリズム論である。また、ドゥルーズ＝ガタリについての二つの研究発表のうち、小泉義之は国家論の観点から、長原豊はレント論への注目から、それぞれ「政治」問題と「経済」問題の分節の見直しを促す問題提起を行なった。

以上、本年度の研究会では、具体的な「ヨーロッパ現代思想と政治」の関係についての歴史的検討を進めるとともに、その歴史的展望に立ちながら、現在いかなる政治＝思想的介入が可能かについても活発な議論が交わされた。

7. 共同研究会に関連した公表実績（出版、公開シンポジウム、学会分科会、電子媒体など）

出版に関しては、市田良彦『革命論：マルチチュードの政治哲学序説』（平凡社刊、2012年2月刊）の刊行が特に重要である。アルチュセール以降のフランス・イタリアを中心とする現代政治哲学を、革命論として読み抜くこの小著は、あとがきにも記されているとおり、本研究班の班長から班員に宛てられた問題提起・論点整理の性格を持っている。市田良彦・王寺賢太・小泉義之・長原豊の4人の班員と桂秀実の共著『脱原発「異論」』（作品社刊、2011年11月刊）も、この共同研究班から生まれた。東日本大震災と福島第一原子力発電所での原発事故の勃発以来の政治情勢と「脱原発」運動の現状を議論した本書は、新聞各紙で言及され、『週刊読書人』誌上では金森修（東京大学教授）との論争に発展した。ほかに単著の公刊としては、廣瀬純『蜂起とともに愛が始まる一思想／政治のための32章』（河出書房新社、2012年1月刊）、翻訳書の公刊としては、松本潤一郎訳、テリー・イーグルトン著『なぜマルクスは正しかったのか』（河出書房新社、2011年5月刊）、信友建志訳、アントニオ・ネグリ著『スピノザと私たち』（水声社、2011年11月刊）と中村勝己ほか訳、アントニオ・ネグリ著『戦略の工場』（作品社、2011年11月刊、市田良彦解説）がある。

公開シンポジウムとしては、2012年2月5日の「日本から見た68年5月」が特筆される。京都大学百周年時計台記念館で開催されたこのシンポジウムは400人を超える聴衆を集め、毎日新聞でも報道された。また、2011年5月14日には市田良彦『アルチュセール：ある連結の哲学』（平凡社2010年刊）をめぐって、市田良彦・小泉義之の2人の班員がパネラーとして参加して人文研アカデミーの公開シンポジウムを開催した（ほか阪上孝が参加）。このシンポジウムは、2011年10月22日のトクヴィルをめぐるもの（富永茂樹、山室信一、宇野重規が参加）、2012年1月22日のルソーをめぐるもの（桑瀬章二郎、仲正昌樹が参加）とともに、王寺が司会を務めた人文研アカデミー「政治を考える」セミナーシリーズの一環である。本共同研究班では、発足以来ホームページを運営して、研究会の進行状況を外部に公開している。

8. 本年度の共同利用・共同研究の参加状況

区分	所属機関数	参加人数	延べ人数
学内	2	6	22
国立大学	3	3	18
公立大学	0	0	0
私立大学	8	11	48
大学共同利用機関法人	0	0	0
民間・独立行政法人等	5	5	17
外国の研究機関	1	1	1
(うち大学院生)	(0)	(0)	(0)
計	19	26	106

※当該年度の共同利用・共同研究参加者の所属機関数、参加人数、延べ人数を区分に応じて記入して下さい。

※「学内」の所属機関数は「学部数」等を記入して下さい。

※参加人数及び延べ人数の算出方法は、以下の例に基づき算出して下さい。

(例)

- ・ 1つの共同利用・共同研究課題で2人を共同研究員として3日間受け入れた（参加した場合）：参加人数2人、延べ人数6人

9. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

論文数	29
上記のうち国際学術誌に掲載された論文数	4

※研究者がファーストオーサーであること。学内の紀要等に発表されたものを除く

なお、高いインパクトファクターを持つ雑誌等に掲載された論文がある場合、その雑誌、掲載論文、そのうち主な論文の詳細等

掲載雑誌名等	論文名	発表者氏名
Les Temps Modernes, no. 664 (2011/5-6), p. 194-209.	"Althusser, un 'typapart', une bibliothèque à part?"	François Matheron, Yoshihiko Ichida
『思想』2012年1月号、 p. 184-196	『田辺元のコミュニズム』	小泉義之